

「鏡の村に棲む妹」を密かに憧れる人

山口賀代子エッセイ集『離湖』に寄せて

山口賀代子さんは、京都在住の謎の多い詩人だ。私は何回かお会いしてかなり話しこんだ思いもするのだが、決してこのような人だと断言できない不思議な人だ。京都・大阪・岡山など関西や中国地方の詩人達は、詩だけではなくエッセイの名手が多いと、私は心密かに思っていた。山口さんが編集していた詩誌「左岸」と現在も発行している「左庭」などは送られていてエッセイも読んでいたこともあり、その名手の一人が山口賀代子さんだった。二〇一〇年の一月に京都の浅山泰美さんのエッセイ集『京都・銀月アパートの桜』が刊行された。山口賀代子さんは、そのエッセイ集が届いた直後に読んで高く評価されて、詩友の浅山さんに温かい言葉をかけてくれた。その後にも私も私信のやり取りが始まり、心の底から良いものは良いと率直に語る山口さんの審美眼に私は信頼感を抱いたのだった。浅山さんのエッセイ集にはエッセイの前に短歌が挿入され、また本人が撮影した十数点のモノクロ写真も収録されていたが、このエッセイと短歌と写真を組み合わせた編集・造本の新しい試みに、山口さんは強い関心を持ってくれた。私は一人の詩人が表現者として様々な可能

性を秘めていて複数の才能を持っていることをよく知っている。山口さんもカメラを片手に散策し、一期一会の光景を撮っていて今回のエッセイ集にも所々に使用させて頂いた。また絵画などの芸術にも造詣が深く、先日も東京や関東近県に足を運び、詩友の岬多可子さんと画集出版社夢人館の小柳玲子さんと美術館巡りをしたらしい。山口さんの行動原理は、きっと美しいものを探す嗅覚のようなものに忠実に生きることをモットーにしているのかも知れない。今回のエッセイ集でも装画には、戸田勝久氏の絵画を使用したいと提案され、本人と連絡もとつてくれて承諾してもらい、自分で装丁のデザイン案をパソコンで楽しみながら試みて私を驚かせた。その行動力には、妥協しないでプロのスタッフと優れた本を目指し作り出していきたいという願いが込められている。

そんな山口さんからエッセイ集を作りたいという相談をされたのは、今年の四月の初めに京都のギャラリーで行われた浅山泰美さんの出版記念会とライアーの演奏会を兼ねた集まりだった。翌日に時間を取り、山口さんと嵐山や桂周辺を散策しながらエッセイの様々なテーマなどをお聞きした。私は山口さんが大堰川に架かる渡月橋や嵐山の山桜に降り注がれている光を染しんでいるように思えた。嵐山の中でもこの場所の何時頃に差し込んでくる光に包まれた光景が美しいと体験的に分かっていて、さりげなく山中の寺院周辺の美しさを語るのだった。そんな話を聞いて私は、嵐山を含めて本当の

美しいものを伝えようとする山口さんの願いをエッセイ集の中に実現させたいと考え始めていた。

山口さんの第一詩集『離世』の中に、「菖蒲池」という詩があるので、引用してみる。この詩には山口さんの今回のエッセイ集に流れている感受性の原型があるように思われてくる。

菖蒲池へ行こうと妹が誘いにきた

そんな池はしらないと言うと

原生のころから生きている生物が

生息する 不思議な池なのだよ

案内するとういので

ついでいくと

田や畑を過ぎ

高右衛門谷とよばれている谷へはいる

木立に囲まれ たしかに

池がある

母につれられてよくくる谷なのに

池があることに気づかなかった

覗くと

面長の二つの良く似た顔が

水面に映っている

じつと見入っていると

池の底に見えるものがある

村がみえる

田があり 畑があり

耕す人までいる

あれは私の住む村なのだよ

妹は言った

なにかもこの村に似ているけれど

姉さんには 住めない村

耳をすますと

水底から

祭り囃まできこえてきて楽しそうなので

私も行きたいと言うと

それはできないのだよ

もつと妹のことを聞いてみたかったが

日も暮れてきたので

帰ることにした

妹に会ったことを告げると

母は言うのだった それは

鏡の村に棲む妹をみたのだろうと

この詩に出てくる妹とは、山口さんの分身というよりも桃源郷のような憧れの世界に住まう美の化身のような存在だろう。かつて存在し今もどこかに身近なところから入り込める異次元の世界を山口さんは、感知することができのさう。この隣接する「鏡の村に棲む妹」が暮らす「不思議な村」を山口さんは、探し続けているのかも知れない。現実を少しずらすことによつて世界が美しく立ち現れてくるように詩的な物語詩を書き続けてきた。第二詩集『おいしい水』の「散歩者」という詩は、月の夜に咲く青い薔薇に水をやる少年とその美しい光景をみる散歩者を記したものだ。また第三詩集『海市』の「聖地」という詩は、村役場の青年から「ブナ林にかこまれた不思議な地があった」廃村の思い出を聞きながらかつての村の「至福の時間」を感受してしまう詩だ。そんな近在の村々の記憶にタイムスリップしてしまう心性が山口さんには備わっているようだ。

今回のエッセイ集『離湖』は、詩では書ききれなかった京都界限や京都で出会った個性的な人々、京都府のはずれの出身地の舞鶴や離湖などの細部が魅力的な文体で活写されている。I章冒頭のエッセイ「離湖」という名の湖は、実在する日本海に近い京都府の湖だそう。しかし山口さんの書き記しているのは、「離湖」への密かな憧れであり、理想化され

た根源的でもある神秘の湖だろう。また吉野はもちろん、嵐山、嵯峨野の人形工房、円山公園、有栖川の桜など山口さんの視線は、桜狂いに相応しい熱気に満ちているだけでなく、桜を愛する命の限りある人びとの哀歓や切ない思いを描いているように思われた。II章「ほのぼの屋」の冒頭のエッセイには、その出身地である舞鶴の中で注目を集めている障害者のスタッフがプロの味やサービスをしている、海辺のレストラン「ほのぼの屋」が紹介されている。また西舞鶴駅で見かけた車椅子の元女優に声を掛ける場面、故郷の友人・友人たちなどを見守る眼差しは、心がとても温かくなる読後感だ。III章「作家の眼」には、若い頃に京都で交流した個性的な人物たちとの出会いと別れ、源氏物語の登場人物を自分に引き付けながら語り、先日亡くなった歌手浅川マキなど、山口さんの偏愛が古典から現代文学、現代音楽まで語られていて興味が尽きない。

山口さんの言葉が織りなす「鏡の村に棲む妹」を探す試みは、読者の心の鏡にも強烈な光と影の不思議なイメージを喚起させるだろうと思われる。そこにはこの世に存在し生きていることへの謎や不思議などを垣間見ることが出来る。多くのエッセイを愛する人びとに読んでもらいたいと願っている。